

マーケット概況（2022年2月）

2月の債券相場は、日米金融政策の正常化観測が燦る中、売り先行で始まり10年365回債の利回りは前月末比0.010%上昇の0.180%で取引を開始した。3日開催の英中銀・金融政策委員会やECB理事会がタカ派的内容になったことに加え、4日公表の米国雇用統計が市場予想を上回る強い結果となったことで相場は下げ幅を拡大し、10日に10年365回債の利回りは0.230%まで上昇した。10日夕方に、日銀が14日に10年債を対象に指値オペを実施することを予告すると同ゾーンの金利上昇は一服したが、10日公表の1月米国CPIが予想を上回る伸びとなりインフレ懸念から米国長期金利が一時2%を超えたことや、ロシアがウクライナ国境付近から軍の一部を撤収させるとの報道が売り材料となり、17日に債券先物3月限は一時149円80銭まで下落した。しかしウクライナ情勢への懸念が再燃したことから相場は買いに転じ、24日にロシアがウクライナへの全面的な侵攻を開始すると日経平均株価が昨年来安値を更新するなどリスク回避姿勢が強まり相場の支えとなった。月末にかけ、27日に日米欧が国際銀行間通信協会（SWIFT）の決済網からロシアの一部銀行を排除する金融制裁に合意し、世界的な景気下押し懸念が高まると相場はさらに上げ幅を拡大して、結局10年365回債の利回りは0.180%で取引を終えた。

<短国市場>

3M金利は-0.09%台を中心に推移したが、発行額が0.7兆円増額の5.7兆円となったことから月中旬以降は-0.08%台に上昇した。4日の3M1056回債入札は最高落札利回りが-0.0930%だったが、発行増額となった18日の3M1060回債入札では-0.0763%に上昇した。24日の6M入札の堅調を受け、25日の3M1062回債入札では-0.0837%に低下し、セカンダリー市場では-0.094%で取引を終えた。6M、1Y金利は-0.09%台でスタートしたが、2年債利回りの上昇に連れて軟調な地合いとなった。17日の1Y1059回債入札は最高落札利回りが-0.0491%、24日の6M1061回債入札は-0.0766%となったが、国庫短期証券買入オペが1.5兆円(前回は1.0兆円増)に増額されたことや投資家需要により需給環境が好転し、いずれも-0.07%台で取引を終えた。

<一般債市場>

10年地方債は国債カーブ+6.0bpとスプレッドが維持され、供給量が限定的なことや国債金利の上昇により昨年4月以来の高利率となったことから需要は旺盛だった。5年地方債は絶対値プライシングからスプレッド方式に回帰し同+5.0bpで起債され順調に消化された。既発債は、国債金利のボラティリティが上昇し先行き不透明感の強い状況下、一部の銘柄で水準やスプレッドの調整が意識された。社債の発行額は、リテール債のソフトバンクグループ劣後債5,500億円の大型発行が全体額を押し上げ、月間9,375億円と前年同月比1,512億円増加した。一方、銘柄数は金利上昇など起債環境の変化を受け、予定していた起債を延期する事業会社が相次ぎ前年同月比で減少した。

◎ 主要債券月間四本値

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#365	0.180(1日)	0.165(1日)	0.230(10日)	0.180(28日)
#364	0.165(1日)	0.150(1日)	0.215(10日)	0.165(28日)
#354	0.040(1日)	0.040(1日)	0.100(16日)	0.070(25日)
#150(5Y)	-0.010(1日)	-0.015(1日)	0.060(17日)	0.010(28日)
#179(20Y)	0.575(1日)	0.570(1日)	0.745(17日)	0.650(28日)
#1054-#1061 TDB(6M)	-0.090(9日)	-0.094(9日)	-0.070(24日)	-0.070(24日)
#1055-#1062 TDB(3M)	-0.100(4日)	-0.100(4日)	-0.083(18日)	-0.094(28日)